

国公立大学合格など。国公立大学のみならず、その多くが自己の進路第一目標を達成したものと考えられております。数的には私立大学に進む生徒より国立大学に進む生徒が多いためです。一学年四クラス（二〇名定員）になって三年が経過しましたが、生徒の学力の伸び率が、卒業時の進路状況は県下トップクラスであり竹田高校ここ五〇年を顧みるに「第二の黄金期」であると自負しております。おそろく竹田高校が大分市内にあったとしたならば、U野、M鶴、H府高校の次には位置するものと思えます。また、二年前の着任時から生徒満足度一〇〇％の日本一の学校を標榜し努力を重ねているところでございませぬ。そして「み・そ・あ・じ（身だしなみ・掃除・挨拶・時間厳守）」の徹底を図り、頭でっかちではなく人として一流になる基礎を養うべき指導を重ねております。生徒満足度は卒業前の生徒がほぼ九〇％、全体としては八〇％程度、保護者満足度、地域満足度は九〇％を越えておりますが、まだまだです。現在、生徒も教師も成長中！と言ったところでしょうか。お伝えすべきことは山のようにありますが、昨年、この会誌担当の日教諭がうっかり「校長は字数制限は無いです、～と思います」などと口を滑らせたことを口実にして一ページ五分の二の紙面を使ってしまったことの反省から（既に同じ轍を踏んでしまっているような気もしないではありませんが、まあ、編集時にうまく調整されることを願って、きつと来年は依頼がなくなるでしょうし）そろそろ最後にしたいと存じます。が、最も強調したいことでもあります。三年も連続して定員を割ったら

切腹もんだ、との覚悟で臨んだこの一年でありましたがそのとおりになってしまい大変申し訳なく、一言もありません。力不足を心よりお詫び申し上げますばかりです。今年度阿蘇市の波野中学から三名が勇氣ある入学をしてくれましたが、竹田市内からはここ数年、約半分の生徒、豊後大野市からはほぼ二〇程度の生徒が入学している状況に大きな変化はありませんでした。来年は両市合わせて八〇名程度の中学生数減です。その後も増える見込みはありません。昨年竹田市の新生児は一〇〇名ほどです。いかにして定員確保をすることが喫緊最大の課題であり全く猶予のないものとして捉えております。竹田高校史上、未曾有の局面であります。学校としては教育水準の維持向上、魅力アップに全精力を注ぎ生徒・保護者・地域の満足度を一層高め、広報活動にも力を入れ、出来ることは何でもやる覚悟です。本校は中津南、別府鶴見、日田、佐伯鶴城、杵築、宇佐、臼杵と同様、地域の進学指導重点校に指定されて久しいですが、進学実績としてその八校の中心にはいつとも位置します。宇佐、杵築、臼杵とともに来年度二二〇周年を迎えます。その学校が八校の中でも最も厳しい地域環境にあります。これまで三クラスの進学校は県内外ありません。それどころか、三クラスとなれば統廃合の対象となるでしょう。本校はその瀬戸際、危機にあると言っても言い過ぎではないと思われませぬ。謂わば、生き残りをかけた戦いのスタートに立っていると言えます。高校のない地域が如何なる道をたどるか、一〇年前の緒方工業、大野高校、竹田商業の統廃合の跡を追うまで

もないことです。地域の方々に危機感を共有して頂き、同窓生の皆様のお知恵とお力を拝借し本校の進むべき道に標を設け、永久に光輝ある伝統が継承発展されるようアクシジョンの巻き上げをお願いします。来年の二二〇周年の祝賀がそのような意味深いスタートであることを衷心より祈念するものであります。シン・カムイン（冒頭に同じりありがとうございませぬ）。



協力

竹田高等学校

PTA会長 甲高 幸一

竹田高等学校同窓会の皆様には、日頃より海外派遣事業・後輩支援事業を通し後輩の育成・支援に尽力頂いております。またPTA活動に関しても、後藤会長を中心に多くの同窓会会員の皆様協力頂いております。心より感謝申し上げます。

初めに、熊本地震に於いて、被災されました皆様へ心よりお見舞い申し上げます。一日でも早く普段の生活に戻れますよう、心より願っております。PTA会員家庭に於いても、五十数件の被災が学校の調査により判明しており当初、総会時に募金活動また終了時に懇親会を検討致しましたが、多くの会員の方が被災され不便な生活を送られた事などを考慮し、見送らせて頂きました。

大分県立竹田高等学校 同窓会報



「竹高我等眉上がる」

竹田高等学校同窓会

会長 後藤 眞一

本年三月に卒業され、新たな仲間として歴史と伝統ある同窓会へ入会されました六十八期の皆様方を心より歓迎し、若い力が同窓会の元気につながることを大いに期待しているところです。又、竹田高校同窓会会員の皆様方には同窓会活動ならびに母校の充実、発展に多大なご支援、ご協力をいただき深くお礼を申し上げます。今回、四月十四日の熊本・大分大地震では、熊本・大分・竹田に甚大な被害をもたらし、まだまだ余震は続いております。特に熊本在住の同窓会会員の中にも被災された方がおられ、心より御見舞い申し上げますとともに、一日も早い復旧をお祈りする次第です。

本校同窓会総会・懇親会

二十七年年度同窓会総会は、六月六日ホテル岩城屋にて二八名の会員の方々の出席の中、開催いたしました。土居昌弘県議会議員、首藤竹田市長、橋本豊後大野市長を始め多くのご来賓のご出席を賜り、総会、派遣事業の生徒発表の後に懇親会、五十五年卒業のソプラノ歌手西みほさんのリサイ

全国地域同窓会、ふる里会

二十七年年度も全国各地域で同窓会、ふる里会が開催されました。六月には、第二十九回関東同窓会総会が松良会長のもと四十九年卒、五十九年卒の方々が幹事となり二三〇名を超える会員の出席の中、開催されました。懇親会は「和三BON」演奏、竹田の大物産展等盛りだくさんの会となりました。二八年度総会は七月二日グラントヒル市ヶ谷で開催されます。特に音楽劇「瀧廉太郎物語」は一見の価値があります。多くの会員の方々の出席をお願いします。

七月には、山本会長のもと東海豊後竹田会が東海県人会と同日に開催されました。少しづつではあります。が若い世代の参加も見られ、盛り上がったところ。又、関西同窓会

Vol.40

発行所 大分県立竹田高等学校 同窓会事務局

印刷 株式会社 竹田支店

の設立準備会の立ち上げもあり、二十八年九月十日(土)大阪第一ホテルにて設立総会が決定され、開催に向けて準備を始めたところ。十月は、末吉会長のもと福岡竹田会の総会が開催。総会後、アクロスホテル福岡にて、西みほさんのコンサートを開催し多くの会員の方々が西さんの歌声にふる里を懐かしむひとときでした。又大分、別府合同同窓会総会が河野会長のもと開催。歌あり踊りありとにぎやかに懇親の輪も広がりました。福岡竹田会、大分別府同窓会も出席者が高齢化し、これから若い世代をどう取り込むかが今後活性化への課題となっています。本同窓会も積極的に福岡大分の若い会員に広報していきたいと思っております。二年二月には県庁職員で構成されている県庁臥牛城会が飯田会長のもと開催。いまや県議会議員四十三名中三名が同窓会会員でもあります。土居議員、森議員、木田議員三名もご出席いただき、職員の方々の情報交換も大いになされました。

昭和三十七年卒三十七期の卒業三十周年記念同窓会が齊藤期別代表、白坂幹事を中心に、卒業以来初めての同期会としてこの記念同窓会を開催。三十年ぶりにもかかわらず多

PTAでは本年度サブテーマを『協力』と掲げさせて頂きました。この言葉は、P会員なら当たり前：と思われるかも知れませんが今年度より多くの方に活動に参加し協力をお願いしたい事業が多くあり、あえて『協力』とさせて頂きました。まず取り組むべきことは、本年度JRのダイヤ改正に伴い、豊肥線十九時台の列車が廃止され、部活動を終えた生徒が駅で一時間以上待つ事態となっています。当たり前の事ですが、帰宅時間も一時間以上遅くなり、安全・安心を考えた場合でも、この問題に取り組む事が最重要課題だと考えています。同窓会の皆様にも協力頂ければ、問題については、三重総合高校に於いても、同列車での通学生に影響が出てくるので、問題解決に向け両校で協議していく事となりました。また三重総合高校が中心となり開催される、県南・豊肥研修会では、豊肥は一つを念頭に置き三校で協力し現在会議を重ね成功させるべく協議を重ねております。竹田高等学校も発表校となっており、役員を中心に資料作りを始めた所で御座います。さらに竹高館セミナーに於いて豊肥研修会に関連した内容の研修を行う事とし、研修発表を行う上での資料にしたいと考えております。

近年の生徒数減少に歯止めがからず、数人ではありますが、定員割れを起しております。昨年市P連との共同事業で、市内三高校による「地元の学校へ」をテーマにした研修会では、校長先生の話により多くの生徒の市外流失を

防止：と聞いています。ただ、入学を待つのではなく高校からより多くの魅力を発信する必要性があり、今年度はPTAの立場から見た竹田高校の魅力発信する事業を現在市P連会長に打診しており、今後活動してまいりたいと考えております。

例年の活動に関しても、より子どもや学校に沿った形での活動を考えており其のためには、昨年度行った生徒会との意見交換会を「竹高つと語らんかい？」と名前を替え実施し、さらに学校（先生方）とも「竹高つと語らんかい？」を行い内面から、子ども達を甘えさせ過ぎず、でも子どもに寄り添うPTA活動により、自然に魅力発信して行き、さらに同窓会の皆様から支援を受けている事業を竹田高校の魅力として発信したいと考えています。

歴史と伝統を誇り、地域唯一の進学校として来年度二二〇周年を迎える竹田高等学校：その記念すべき年へ役員・学校・保護者・地域そして同窓会の皆様と連携しタスキを渡したいと考えています。



財源の確保は必要不可欠です。現在、期別毎に年一百万円の維持会費を納入していただいております。すでに多くの期は納入していますが、まだ未納の期もあります。全期に完納に向けてきめ細かな取り組みを行っていく所存です。より一層のご理解、ご協力をお願いいたします。

後輩支援

母校の発展、生徒の育英に関してですが、竹田高校を取り巻く環境は、大変厳しい現状となっております。竹田高校の魅力化、支持される学校であり続ける為には、何よりも魅力いっぱいのキラキラした生徒の育成にはかありませぬ。同窓会としても以前に増して一層の支援の必要性が求められています。

八月三日より六日まで海外派遣事業でベトナムへ八名の生徒を派遣いたしました。ハノイに進出している会社を訪問し、駐在員の仕事、日本人とベトナム人の仕事に対する考え方の相違、賃金、外国人社員の生産性を上げる為の方法等を直接学び、ベトナム経済を肌で感じ、グローバルな世界への思考、ベトナムの歴史、文化の学習、語学研修と内容のある派遣事業が生徒のこれからの意欲につながると願っています。

部活動への支援も実施いたしました。日頃の練習の成果を十分発揮し、上位大会へ出場した生徒諸君が力の限り存分に戦う為に支援をいたしました。

生徒のスキルアップの為に読書は欠かせません。本年度図書の実践の為に、毎年里見奨学会よりの図書支援に加えて二件の支援がありました。一件は、関東同窓会からの大志文庫（アンビシャス文庫）の創設。もう一件は、亡き奥様の竹田高校への思いを尾下文庫として残していただきました。

した。それぞれの文庫は毎年増書していただけるそうで大変ありがたく、そのご厚情に感謝申し上げます。

今後も同窓会として学校とともに、生徒の育成を推し進める所存です。

創立二〇周年記念事業に向けて

いよいよ二〇一七年(平成二十九年)には、創立二〇年の記念すべき節目を迎えます。

一八九七年(明治三十年) 大分県大分尋常中学校の四分校の一つとして誕生いたしました。以来一九〇〇年には、分校より分離独立、大分県立竹田中学校として新しい出発をしました。その後設立された県立竹田高等女学校、県立竹田商工学校と一九四八年(昭和二十三年)学制改革により、旧制三校(中学、高女、商工)が合併、新制大分県立竹田高等学校として開校し、戦後の復興に向けた新しい教育が始まりました。明治、大正、昭和、平成と激動する社会情勢の中にあつて一世紀以上にわたり奥豊後地域の最高学府としての教育を担い、創立以来二万六千人余りにおよぶ卒業生を輩出し、地域社会はもとより国内外で社会の発展に大きく寄与貢献してまいりました。これもひとえに卒業生の方々の活躍、ご協力、そして地域社会の多くの方々のご支援、職員の方々のご指導、ご助力の賜物と感謝申し上げます。

この輝かしい歴史をさらなる「新しい歴史」へとつなげていく為に、同窓会、修道記念学林会、PTA、学校が一体となった創立二〇周年記念事業実行委員会組織で取り組むこととなりました。

グローバル化、IT化が地球規模で進み、地域では少子高齢化が益々進む中にあつて、教育に対する価値観の多様化そして、竹田高校の存在基盤をも揺るがす人口減少、過疎化の波にのみこまれることなく、これからも

有為な人材を育み、さらに魅力を増し、飛躍する学校となるために以下の事業を計画しています。一つは、一〇周年より継続されている「生徒海外派遣事業」を向こう一〇年間継続実施することいたしました。この事業は大いに生徒の立志教育に役立ち、これまで派遣された生徒は大阪大学、九州大学・神戸大学など難関大学にも多く合格するなど、県下の教育事業として大いに注目されています。グローバルな視点を学び、ローカルに考え行動できる生徒、将来世界を雄飛し、地域を担うリーダーとなる生徒の育成の好機となるとともに、竹田高校就学への大きな魅力の一つとなることを期待しています。一つは、教育力向上支援、体育・文化部活動への支援等、基金による後輩支援に係る事業。

一つは、明治三十年までに至る教育の遺産こそ、二〇年間連続と伝わる竹田高校の素晴らしい遺産子であります。その遺産子を知ることが、これからの「新しい歴史」を作る上で最上の宝となるにちがひありません。そんな遺産子にスポットを当てた「記念誌を発行」します。一つは「PR動画」の作成です。いろいろな場面で竹田高校のPRが出来るのです。大いに入学者数の増加につながると思います。そして一つは、会員の方々、生徒の皆さんと一緒に祝う慶事の「式典」「祝賀行事」の挙行です。以上の事業を計画しています。この周年事業が竹田高校の発展、維持への一助となることを祈念するものであります。

本校の歴史をさかのぼる時、その萌芽は一二二六年、関幸輔の開校した「輔仁堂」の開塾にあると思つています。以来「友同志、お互いの道をもち、励まし合い(輔)け合う」輔仁の心にこそ竹田高校二〇年の根底に脈々と流れている心だと確信しています。社会、経済情勢は大変厳しい状況

ではありますが、ぜひとも創立二〇周年事業にご賛同いただき格別のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

竹田高校を 未来へ向けて守り育てる

竹田高校の創立二〇周年事業の意義は前段で述べさせていただきました。意味した通り、今回の事業があらためて竹田高校の未来に向けた重要な取り組みであることは疑う余地はありません。

さて、最盛期(岡魂世代)一学年十クラス五七〇名在学していた生徒数も現在、人口減少、過疎化の中で一学年四クラス一六〇名となりかつての生徒数から思えば寂しい限りとなっております。その様な状況下、豊肥地区で唯一の進学重点拠点校として県の指定を受け生徒の学習に取り組み、地域の最高学府として教育を担ってまいりました。

現在、後藤輝美校長のもと「日本一の学校づくり」を目標に教職員が一丸となり満足度日本一の教育を実施しており、その結果も平成二十六年度は九大四名をはじめ国公立大五十五名の合格(学年では三五・九%伸び率一六二%)の達成、今春、平成二十七年度は、大阪大二名、九大一名をはじめ「国公立大現役五十八名(学年で三十七・七%伸び率一六六%)私立大八十二名合格さらに公務員試験なども秀でた成果を取め、入学以来となる生徒の伸び率、進学実績でも豊肥地区の進学拠点校としての輝きを放っています。

竹田高校の地域への役割として、このような学校があるがゆえに、進学上、地元で素晴らしい教育を受けられ、中学から他市へ転出する必要もなく、地域の人口減少の急速な進行の歯止めとなってきたのも事実です。

竹田高校の存在の成果としてITUラインにつながりこの地域の活性化にも大いに寄与しています。

さらに、部活での民俗部の活躍は四〇〇年の城下町の中に宿っている歴史、文化の後継者の育成につながり、瀧音楽祭、竹楽、薪能、岡城さくら祭り等への積極的な参加、そして何よりも登下校時の日本一素晴らしい挨拶は竹田市の魅力であり、中心市街地の元気にもなっています。この様な実績や地域貢献のある竹田高校ですが、教育に対する価値観の多様化、何よりも人口減少、過疎化による受験者数の激減により三カ年にわたって定員割れの事態となっております。

入学者の確保のために同窓会といましてでも豊後大野市でのキャンペーン等実施いたしました。効果は見られませんでした。ただ県教委に働きかけ阿蘇地区からの受験者に対しての居住地制限の撤廃をお願いしてきましたが、今春から居住地からの受験が可能となり、阿蘇市から三名の入学者を得ることができました。しかしながら結果は今年も定員割れでした。こうした状況が続けば、定数減、あるいはクラス減となることは間違いありません。加えて来年以降、竹田市内の中学三年生は減少していきます。ちなみに今年度の出生数は一〇〇名です。まさに「入学者冬の時代」を向かえようとしています。

四クラスが三クラスに縮小すれば、クラス担任だけでなく教員定数が大幅に減らされ、進学指導面でも手薄になり、理科、地歴、公民科に専門科目の教員がいなくなり、進学に対応した教科指導が出来なくなる可能性があります。又、今ある部活動の維持も困難になり普通科進学校にとつて計り知れないダメージとなり、負の連鎖が想定されます。その様な状況では、学校の魅力は

衰退し、過去商業高校の統廃合で経験したように、市立小中学校と県立とでは運営主体が違うためなかなか地域の要請や思いが届きにくい面があります。同窓会、地域の方々から変えて高校存続を考え行動しなければ一気に統廃合へとなりかねません。

今、全国各地でも市町村あげて県立高校の生き残りをかけた挑戦が始まっています。すなわち高校の魅力化です。行って学びたい学校、学ばせたい学校、生徒や地域から希望し期待される学校づくりです。特に島根県の隠岐島前高校の魅力化プロジェクトです。

過疎の島を悲観することなく、それを逆手に海士町が中心となり、積極的に「島留学」で外からの入学者を取り込み、島という教育的な不利を一つ一つ解決し、廃校寸前の学校に多くの生徒が来はじめ、島全体の再生活性化につながった試み、親元を離れて学ぶ生徒を獲得するために寮を完備し、学習、部活の環境を行政とともに整備する高校の増加、地域の特徴を生かした連携として宇宙航空研究開発機構(JAXA)と連携して、魅力を図る鹿児島県の高松など、生き残りをかけた変革が過疎地域を中心に始まっています。

竹田高校の未来への成長は、切実な課題に直面している「今」にあります。生き残った竹田高校はさらに光輝ある学校となるに違いありません。

同窓会でも専門委員会の中で、竹田高校魅力化について検討し、学林会、PTA、さらに竹田市、竹田市教育委員会とも一体的に行動し、竹田高校を未来に向けて守り育てる所存です。その為にも、これまで以上のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

シン・チャオ(越南語でこんにちは) 未曾有の局面(シン・カム) 竹田高等学校 校長 後藤 輝美



「シン・チャオ(越南語でこんにちは)は、同窓会長をお呼びした訳ではありません)」。竹田はね、やはり、つのだきゅうか、おごうちびん、とみまきおもしろう、そうそう、とみまきおもしろう、そうそう、か生徒にも伝えて欲しいなあ」元大阪で新聞記者をしていたと言う首藤康至さんが語る。

彼はベトナム、ダラット在住で昨年の夏、本校第十六回同窓会海外派遣事業で現三年生八名が訪れたハノイまで国内線を使ってわざわざ駆けつけてくれた竹田高校OBである。確か古稀に当たると聞いた気がする。引率団長としてお供した私にとって首藤さんの話が旅を通して実は最も印象深いものの一つなので少々その時のメモを見ながら紹介したい。但し、その話の中身の濃さと薄々と話す口調の速さに加え、私の無知がダブルパンチで容赦なく襲いかかったために、到底メモが追いつかず、さらに言い訳がましく言うと言量が増すほどに最後の方はほとんど直線と曲線でしかないメモの想起追想であるため判読不能部分は想像と少々事後の調べでつないでいることをご容赦願いたい。

「つのだきゅうか(角田九華)はね、岡藩士で儒学者。ホジン堂の次のユイ学館の教官をしていてね。次がシユウドウ館でしょ。「豊後国史」を編纂してね。田能村竹田と藩政をリードしたんです。頼山陽

とも交流があったんですよ。いちびん(小河一敏)はね、本当はかずとだけ七万石程度の中規模の岡藩の家老に二十四歳でなつてね。角田九華に朱子学やら陽明学やらを学んでね、坂本竜馬をなだめたり、寺田屋事件にも一枚かんでいたりしてね、藩主の中川久昭に疎まれたりしながらも結局は初代堺(大阪)県知事にまでなるんです」そう言えば、今年の新入生歓迎遠足を岡城で行った折、そこに熊沢蕃山の碑の横に小河一敏の碑があったことを恥ずかしながら初めて知った。

竹田高等学校 校長 後藤 輝美

「わたなへくましろ(渡邊熊四郎)という人もユニークな逸材です。確か竹田市古町生まれでね、海産物で巨利を得て何でかね、函館に行つてしまつて「函館四天王」の一人と言われてね、手広く事業を展開し、北海道で初めて新聞を発行するやらで今では観光の目玉になっている金森レンガ倉庫を作つた人です」もつと早く知っていたら、この前初めて北海道に行つたとき「裕次郎記念館」など行かないで函館に行つて自慢するのだつた。

「最後のとみまきお(富富夫)はね、びつくりしますよ、出雲王朝の直系子孫であるちゅうのですから。一子相伝の口承伝達とでも言うべき方法でペーパーレスで王朝に関することを伝授されたらしいのです。司馬遼太郎の同僚でね、

大阪の産経新聞の部長をしたことのある人です。司馬遼太郎も「彼の言うことには根拠がある」という風なことを言っていた気がしますが。私は三十年前に出雲地方と一緒に旅行しながら、彼にインタビュすることができたのです。僕の親父の二年先輩だったそうです。から大正五年(一九一五)頃の生まれだと思ひます。(旧制)竹田中学にも在籍したことがあると言つていました、昭和八年頃でしょう。私は一面識もない方でしたが、彼は私を空港で見つけるなり全く躊躇なく、近づいてきて私の名を呼び親父にそっくりだと言いました。すごい人でした。何も見ることもなくよどみなく伝承されたことを語るのです。驚嘆以外の何もありません。「聴いている私も、どこの宇宙の話を読んでいるのか皆目見当がつかなくなるほど少々目眩を覚えた。

「城原神社」存じでしょう。(名前前は知っています、競歩大会の時の関門です)、ツチグモがいてね(どんな蜘蛛?)、名欲山も(はて?)、くたみ山はね(ん?)以下を語られたものと察する。城原神社は、ツチグモを征伐した景行天皇を祀る神社。日本でも最も

古い神社とされる由緒ある神社。ツチグモとは大和朝廷に從わない者たち(まつらわぬ者)。日本書紀一や「豊後国風土記」には、碩田国(おきたの国)今の大分県)には方々にツチグモがいて、竹田の直入郡禰野(ねぎの)にもツチグモがおり城原の名はもともとツチグモの呼び名の一つき鬼(き)から派生し「鬼原」ではないか。万葉集にこの地の名が残っている。「明日よりは、我は恋いなむ名欲(なほり)山、岩踏み平し、君が越え去なば」「命をしまさくもがも名欲(なほり)山、岩踏み平し、またまたも来む」(どちらも都から派遣されてきた役人が任期を終え出世して都に帰る、その役人と恋仲になっている土地の娘と役人の相聞歌であるという)「名欲山」とは、城原近くの小高い丘である木原山(きはるちかかのきばるやま)の別称である。また、名欲(なほり)とは「直入」のこと。また因みに、万葉集には「朽網山(くたみやま)夕居る雲に薄れゆかは、我は恋ひなむ君が目を欲り」と歌われており、この「朽網山」は久住山の古名である。杯は益々進む。彼の話の終焉が見えないまま私は朦朧としながら必死でメモっていたように思うが、実際にはもはやメモとは呼べない代物と化していた。

「あのね、やはりベトナムと言えば安倍仲麻呂ですよ(は?)、はい。奈良時代に遣唐使として唐に渡り「科挙」に合格。日本に帰るとして何度か帰国を企てたけれども失敗し、最後の試みでベトナム中部に漂着、挙げ句の果てにそこでつまり首都タンロン(今のハノイ)で長官におさまった。こんなこともあつてベトナムと日本は縁がで、その後も親交を深め親日